

# 大原騒動と円光寺浄明師の二つ

上村文隆

## 一、大原騒動

先日学級づくりサークルで、友人が書いた大原騒動の「夢物語」と「夏蟲記」の全文解読の本を購入した。三〇八頁にも及ぶ労作だ。

全てを読む気力はもとよりのない。大原騒動全体をつかむことはムリだと思う。そもそも郡上一揆の関連の資料もあるのだけど、まだ読んでいない。

でも、大原騒動については、昔からつながりがある。

一つは上木屋甚平衛とその息子三島勘左衛門に興味があつて、そのつながり。もう一つは、昨年尋ねた古川の円光寺で聞いた浄明師の話。その折りに頂いた「円光寺五百年史」もその部分だけ読んだ。

これは大原騒動の時に円光寺の住職が本山から異安心と判談され、本山に蟄居させられたことがあり、この法義についての法論は飛騨一円の真宗寺院門徒を巻き込み、三業惑乱に匹敵するべらりの争論となった。

この争論とかねて疑問に思っていた大原騒動との関連については、この「夢と夏」に書いてあったので記録しておく。

そもそも、大原騒動でこの法義と異安心問題がなぜつながるのか。

浄明師の教えは飛騨一円はおろか、美濃、尾張、三河、越前、そして郡上石徹白にも及んでいる。学識深く夢にも夏蟲にもとり上げられ紹介されている。

その教えについてもっと知りたいのだけど、いかんせん資料がない。本山にとり上げられたからだ。ただ、「五百年史」には「同行は鏡なり」という文章を紹介しており、成程その通りだと納得させられる。

さて、この法義論争と騒動の関連について夢はこう記す。

「このたび江戸表において御評定ありけるは、飛州百姓ども騒動の体を考えるに、一向公儀を恐れざる振り合ひなり。上を恐れざるは死を恐れざるいわれなり。死を恐れざる根元といつは、一國(じつじつ)一向宗にて、一途の宗門なる故なるべし。……その不正義は切支丹同様死をもいとわねむと見えたり。このたび一國騒動もこのいわれなるべし。ならざりにはさし置きがたし。」

と書いてある。(島原の乱が幕府に与えた影響は想像以上に大きかった)

もう一つ、問題にされたのが「隠し寄り」。隠れて相談をしていたのではないかと詮議されたことを夏蟲には詳しく書いてある。いずれも法義話をしていたにすぎないと語っている。

「・・・六人同行仲間にて、折節寄合い法義相続つかまつり候事御座候。総じて本願寺門徒は御寄りと申して、時々同行中寄り合い法義の話を致し、互いに信心を磨き合ひ候事に御座候。・・・」

このように同行仲間が集いながら話し合つて法義を深めていたのだと感心する。宗教と一揆との関係について、真宗の寺院同士の争いを利用されたとも考えられるけど、郡上一揆の石徹白騒動でも、白川神道と吉田神道との関連ととてもよく似ている。五百年史の執筆者後藤新八郎氏のまとめを記しておく。

「表向きは正義・不正義で、地元も、本山も、幕府も、処罰をもって事件に臨んでいるが、裏面は地元の寺同志は檀家の奪い合いであり、本山は自己の宗旨に固執し、進歩ある教義は弾圧するし、百姓一揆に手をやく幕府及び地元代官は、その原因を宗教のせいにして、政治の腐敗の浄化を忘れている。末法の世相でしかなかった。」と記している。まったく。

## 二、遺教法語

五百年史には浄明師が病気になった時看病してくれた方たちに対して遺言の形で法語を残したものが記されている。とても素敵な内容なので是非読んで欲しい。

宝曆七丑の春。三枝郷に在つて心地不例に侍るまま、高山に越して、田近亭に寓して前原の治療を受けて居たにしかば、近所好の面々集まり合つて看病し、煎湯、薬治、鍊丹、補療、起臥の助力・食事等よろづに心をそへ給わりぬ。殊に又時々法語、間々の慶讚に病中の疎も諫め、日頃の疎も引き立てられ、内外の親切、世出世の親愛浅からず。ここに快氣を得て立ち分かるゝ時にのぞみなば、看病親切の謝礼のため、死後になり、且形見にもと思ふ心より筆を運ばせて左の如く。

南無阿弥陀仏のいわれを能知りたる人こそ、仏にはなるべけれど伝えり。其のいわれを能く思召し知り候事、何より何より肝要の事に候なり。とてもかくても死ぬべき命を持ちながら、死しての後の一大事を心に掛けざるほど悲しきはあるべからず。今世の心得にて死して後さとの台に赴くか、又迷いの底に沈むか、二つ一つの大事のるかそるか簡（見）。命は呼吸に迫りぬれば明日の簡と待つべき事に非ず。能々思案をめぐらすべき事なり。

問 南無阿弥陀仏のいわれを如何知り侍るべきぞ。

答云 お言葉に「本願の本末を聞いて信ぜよ（しかるに経に「聞」といふは、衆生、仏願の生起本末を聞き疑心あることなし、これを聞といふなり。「信心」といふは、すなはち本願力回向の信心なり。）」と仰せられたり。抄略

その本といふは悪人女人の罪深く障り重くして諸有利益にもれ、諸仏の利生に嫌て地獄ならでは赴くべき方の無きを本願の思召し立としたまふ、是本願の本なり。此の所請（いわれ）あるが故に悪人済度の本願と申すなり。

次に、末と申すは御願円満と成就して南無阿彌陀仏の御覚りと顕れ、悪人済度の如来とならせたまふを其の末と思ふべきなり。これ悪人女人阿彌陀に限って助けたまふ所請なりと知るべきなり。

問 御覚りの御名を南無阿彌陀仏と申すは如何なる講じ侍らむ。

答云 南無阿彌陀仏と名づけ奉ると云ふは、

善導云「言南无者則是帰命亦是発願廻向之義 言阿彌陀仏是即其行以此義故必得往生」と釈したまへり。

此の御言を御文にやわらげたまひて

「南无といふは助けたまえと思ふ心なり。阿彌陀仏といふはたのむ衆生を助けまします法なり。是を機法一体の南無阿彌陀仏と申すなり」と仰せられたり。

阿彌陀の願在す赴きは極重の悪人女人諸仏の利生に漏れはてつる罪人に助けたまえと思ふ心を発さしめ、其一念に往生の業具わりで碍なく助けたまわんと御願なるが故に、不可思議永劫の修行成就しましたして兼ねて願ひまします如くたのむ機の発するやうに成就したまわるを南無と云ふ。

故に阿彌陀の御正覚をば南無阿彌陀仏と申し奉るなり。是即ち正覚・果名と云ふなり。

正覚とは阿彌陀の御さとりと云ふ心なり。果名と云ふは欠けぬなり、成就したまえる御名と云ふなり。

此の果名の顯るゝ事は十方衆生の往生の願行成就の顯れなれば此の六字を衆生往生の全体と云ふなり。

全体とは例えば十人あるべきことならば、十ながら、百あるべきことならば百ながら円満具足して毫厘も欠けたることなきを全体と云ふなり。然るに一切の衆生南無阿彌陀仏は我等往生の全体なることを知らずして及ばざる廢悪修善心をかくれども貪瞋止むことなければ其の益なき事、水に絵を書くが如くかなはざる。入証得果に身を苦しめども煩惱競ひ起こって止まざる事は糖を運んで淵を埋めんとするに似たり。

阿彌陀の大悲は是を憐愍してかの南無阿彌陀仏の大利を与えんと心を運び身を尽くしたまふ事一念一刹那もたゆみたまふことなく、何とぞ何とぞ思召しかけつめたまふ大悲の慈念勇猛なる故に、お経にも

「荷負群生為此重担」と説き、「諸苦毒中我行精進忍終不悔」と説きたまへば、勇猛の思召し専志の心念今我等が浅間しき貪瞋煩惱の心の底に至り届かせられたる所が行者歸命の一念とは起こり顯れたるなり。

仍て此の一念如来選択の願心より發起せしめたる一念なれば、行者の方より起こり顯れたる一念に非ず、如来御回向の一念とは申すなり。

此れに依って此の一念は例えば樋口の桶の水八分にても九分にてもこぼれず、十分に満たる処よりこぼれ顕われたるなり。よって是を如来の勲習力の顕れとも申すなり。已にご和讃にも

「願作仏の心はこれ度衆生の心なり 度衆生の心はこれ利他眞実の信心なり」とは顕したまうなり。然れば此の行は帰命の一念即南无の二字なり。是南无帰命の一念起こり顕れたれば、機法元より一体の南無阿弥陀仏なるによって、一念帰命する立ち所とりもなおざらず南無阿弥陀仏なり。

此の果号即ち如来の万徳の備わりたまふ南無阿弥陀仏なるが故に、一念たちどころ往生一定なりと心得られたるを南無阿弥陀仏の謂れを知りたるは申すなり。此れを南無阿弥陀仏の他力の信心とは申す事にて候なり。

かかる不足なき御ことはり聴聞の申しわかりつるときには仏恩の称名あるべきこと聖人の御言に「唯能常称如来号応報大悲弘誓果」と顕したまひ。御文には「自身往生の業とは思ふべからず。ひとへに仏恩報謝のためと心得待るべきものなり」と仰せられたり。

又「弥陀にはや助けられまひむらせしる後なれば、御助けありしる御うれしさの念仏なれば、此の念仏をば仏恩報謝の称名とも云ひ及び、信の上の称名共に申し待るべきものなり」又「如来我が往生を定めたまひし御恩報尽の念仏と心得べきものなり」と仰せくだされ候へば、仏恩報謝の称名他事なく御よろこび候事かえすがえすの事に候なり。あなかしこ あなかしこ

浄明 六十八歳

看病之御同行衆中へ

「日光寺五百年史」より

原文はカタカナだがひらがなに直した。

浄明師は宝暦七年六十八歳で没しているので、この文がまさに遺言であった。

### 三、日光寺浄明師の浄

日光寺浄明師のことがもっと知りたくて、検索していたら、「日本宗教文化史研究」という日本宗教文化史学会の機関紙を発見。

日本宗教文化史研究 12(1), 81-97, 2008-05 日本宗教文化史学会

「近世中期における在地仏教」飛驒安永法論と日光寺浄明

一冊二二〇円だったので、二冊注文。昨日、代引きで届いて5140円支払った。論文を一つ読むだけだけど、買ってよかったと思った。

表題の論文の著者は三嶋信氏（高山市郷土民俗館学芸員）。

読みごたえがあり、私が持っていた疑問にほぼ応えるものだった。僧鎔師の批判が本質を突いていないこともわかった。

浄明師の信心の特質は、

(一)この罪惡の自覺(機の深信) (二)同行を鏡となす  
を本質とする。

師はこのことを学林で学んだよりは、諸国を流浪し念仏の教えを味わい深めた祖父や父から学び、また同行から学んでいることが書かれていた。

(二)に対する僧鎔師の批判は權威主義的であり、(二)への批判(本願信受の疑)は、「疑いを持ってしまふのが自分であると認めざるを得ない」ということを読み間違ったもの。

ただ、三嶋氏はこの論争を後の三業惑乱の先駆けと位置付けているけど、むしろそれよりも在地の仏教がどのように民の中に広まっていったのかの方が魅力的だった。だからこそ三嶋氏が言われるように、浄明師の教えに民衆がひきつけられた理由こそが、私たちや教団が学ばなければいけないことなのだ。

参考 三寺参りについて

郡上組総代会の研修旅行(三寺参り)

西暦二〇二〇年四月 仏歴二五六三年五月 令和二年四月